

適正規模農家の家畜の組み合わせに付ては
馬一頭、和牛一頭、鶏三〇羽、兎五羽
勞力設計に付ては

本村の所要勞力は四月—七月、一〇—一一
月に偏して居る故分村後の適正規模農家では田植
期村内供給不足七六〇人となり従來の雇入五二二
人を加へて一、二八二人の不足となる。この對策
として共同田植の實施、農繁期託兒所の開設、田
植期間の延長を計ることが應急對策として擧げら
れ、勞働の強化、作業の共同化、耕地の集團化、
經營の畜力化、家事改善による家事勞働の農業へ
の轉化が恆久對策として提唱されて居る。

(B) 宮城縣伊具郡耕野村(山林地帯)

本村の適正規模の決定方法は左の方法によつて
居る。

- (a) 本村農家一戸當平均人口に從つて家族員數七
人とす。
- (b) 家計費現金支出一人當り三〇圓八八錢とすれ
ば一家族當り二一六圓一六錢を要し反當農業現
金所得二一圓七九錢なれば現金家計費獲得の所
要反別は九反九畝歩となる
而して本村山林収入は主に家計現金支出に充
用され總額の二一%に當るを以て山林収入分を
減すれば七反八畝歩となる。
- (c) 飯米消費は一人當一石一斗八升にて一家族當
八石二斗六升となり反當平均收量二石一斗にて
除すれば所要反別三反九畝歩となり此の經營費
を加算すれば所得割合五四%なるが故に
 $3.9反 + 0.54 = 7.2反$ 即ち七反二畝歩を要す

ることとなる

- (d) 小麥、大麥は一人當消費量小麥三斗四升、大
麥四斗六升となり一家族當り小麥二石三斗八升
大麥三石二斗二升を必要とし反當收量小麥一石
八斗大麥一石七斗とすれば小麥畑一反三畝大麥
畑一反九畝歩計三反二畝歩を要する
而して此の經營費を加算すれば所得割合五四
%なるが故に六反歩を必要としこれ等の畑地は
二毛作をなし得るが故に實際の所要反別は三反
歩とす
- (e) 家事用蔬菜畑は五畝歩を要するものとす
- (f) 尙建物農具等の減價償却見積三〇圓とし且つ
不時の失費に備へる餘剰を現金家計費の二割と
見て四三圓二三錢計七三圓二三錢を要する之を
現金現物を含める反當農業所得三七圓九三錢に
て除し一反九畝歩を餘剰の爲の必要反別とす
- (g) 即ち 現金家計費の爲め 七反八畝歩
自給食料の爲め 一町七畝歩
餘剰並減價償却の爲め 一反九畝歩
計 二町四畝歩
- (h) 之等耕地の生産力を農業經營の改善により一
割だけ増加し得る様農業組織を作るものとして
二町四畝歩の一割減を所要耕地とし即ち約一町
八反歩を安定農家の適正規模とす

山梨縣米穀業者の滿洲開拓現地視察
報告

中小商工業者の轉失業に伴ひ其の歸農問題が朝野の

關心事となつてゐるが、山梨縣米穀業者が全國に魁け
て滿洲の開拓現地視察を行ひ滿洲開拓農民として更生
することの可能且つ有望なりとの視察報告を齎らせる
ことは各方面に極めて重大なる關心を惹き起した。

同視察團は團長(五二歳)を除き全部三十歳代の六名
の代表よりなり、昭和十五年九月十一日出發同年十月
二日歸還せるもので、その視察経路は甲府—東京—下
關—釜山—安東—五龍脊—湯山城—奉天—新京—公主
嶺—哈爾濱—平山—帽天山(北後塘)—三門千家—青龍
山)—牡丹江—千振郷—山梨村—頭立溝—佳木斯—牡
丹江—圖們—羅新—新瀉—東京—甲府に及び、全滿に
於ける開拓團の狀況並に滿洲糧穀株式會社雜穀統制的
狀況及び同社就職後の作業狀況を視察し以て縣下米穀
業者の入植を指導援助することを目的として行はれ
た。その報告に基き農林省經濟更生部が編輯せる「歸
農對策と滿洲開拓—山梨縣米穀業者の滿洲開拓現地視
察報告」を掲ぐれば以下の如くである。

歸農對策と滿洲開拓

— 山梨縣米穀業者の滿洲開拓視察報告 —
一、轉業對策としての滿洲開拓

中小商工業者の轉失業問題が重大視せられ、歸農問
題が強調されてゐる。然し今日の歸農問題は、決し
て、往年のその如き失業對策ではない。即ち失業し
て已むを得ず農に歸るといふやうな消極的なものでは
ない。それはもつと積極的意義を持つ、國策に順應す
る生産化の一大運動である。即ち廣漠限りなき滿洲の
沃野に新農村を建設して、友邦滿洲國の建設開拓に協
力すると共に、日滿兩國を通ずる食糧を増産し確保す

ることである。

往年の經濟恐慌當時、都會から多數の失業者が歸農したが、その結果農村人口は著しく増加し農村の苦みを一層深刻化した。農村は都會の過剰人口の貯蔵庫として、苦しい中にも持久力の偉大さを發揮したが、今再びこれを繰返さうとするのではない。さういふことは、常に農村にとつて迷惑千萬であるばかりでなく、都市の轉業を必要とする人々に對しても、決して親切な考へ方ではない。

今は國防國家建設に向つて、國家總力の時である。國土計畫が土地と人口とにわたつて、根本的に編制されんとする時である。歸農問題を、單なる失業對策として取扱ふべきでなく、それは日本人の再編成、その生産化の問題でなくてはならぬ。こゝに國家として歸農問題を取上げる重大意義があり、歸農せんとする人々に、大なる抱負を持つて貰ふ必要があるのである。

我國は瑞穂の國ではあるが、土地、肥料、努力等の關係において、農業生産は無限大に増加せず、國民食糧の確保に一層これが増産を圖らねばならず、今これを實行しつゝあるのである。この秋にあつて、轉業對策としての歸農、滿洲開拓農民としての大陸進出は、時局の要求に即して、日滿兩國の食糧確保に貢獻し、兩國の不可分關係を現實に強化する一石三鳥の效果的對策である。

全國に魁けて、山梨縣の米穀業者が、轉業のため滿洲の開拓現地を視察した。それは、統制の強化に伴ひ、轉業を餘儀なくされる配給業者が、大陸に進出して、開拓農民として大いに働かうではないかといふこ

とからである。

甲府市ではこれまで二百十軒の米屋があつたが、本縣は元來米の輸入縣ではあり、米の買付が非常に困難になり、休業せねばならぬやうな窮境に陥る者が多くなつたのである。依つてこれが救済の苦心の結果、全市の業者が合同して米穀共同販賣組合を結成して、二十六箇所の共同配給所を設けた。そして米屋の主人が配給に従事し、月四十圓のサラリーマンになり、自分の代りに雇人を出したときは、月三十圓を貰ふことになつた。更に米屋のうち精米機を持つて居る百六十人は、それを出資して山梨縣精米株式會社を組織し、その精米所から市内二十六箇所の共同配給所に米を配給する。かうして一應の統制はついたが、問題はなほ残されて居る。從來二百十軒の米屋で従業員が五百人位あつたが、この統制下では、約八十人あれば充分であり、精米機も八十六臺のうち十臺しか使つてゐない。その過剰の人と機械をどうするか、これが残された大問題である。若い雇人は他に轉業の可能性はある。剩つた機械もその處置には困らないであらうが、内地で他に轉業の出来ないものは何とかせねばならぬ。統制下轉業の十字路に立つ同業者を如何にするか。これは單に甲府市だけのことでなく、雖ては全縣下の問題となり、米穀業者以外の配給業者も同じ徑路を辿るべく、必然な、深刻な、業者の浮沈に關する重大問題である。今や全國的に、中小商工業者の轉失業者對策は、焦眉の、切實な、重大問題として取上げられて居る。

それで甲府市の米穀業者は、全國にトップを切つて、同業者を大陸に進出させ、算盤を鉄に換へて開拓

の戦士たらしむべく、滿洲の開拓現地を視察した。そして視察の結果『業者は、開拓農民として、極めて適當である』との斷案を下した。

その開拓現地視察報告と歸農對策懇談を兼ねた會合が、十月七日午後七時から甲府商工會議所で開催された。中央からは農林省經濟更生部竹山技師、農村更生協會土屋主事、滿洲移住協會西田指導部長、日本技術指導協會丸の内總務部長、新潟滿蒙會館水館長、三井報恩會小林總務課長等、縣からは盛本經濟部長以下關係各課長係官、甲府市小泉助役、伊東産業課長、商工會議所、各種商業組合代表者出席、現地視察團の代表として穴山豊氏の報告があつた。午後七時三十分から同十一時三十分まで四時間にわたり、熱心な報告と眞剣な討議懇談が行はれたが、本資料はその滿洲視察報告の概要である。

滿洲開拓農民の大量進出は、大和民族の大陸移動であり、東亞新秩序建設の一大基石である。そしてそれは、獨り農民だけでなく、商工業者の開拓民としての大陸進出も、その基礎を培ふ所以であり、それは大陸開拓の國策遂行上重大なる役割を演ずると共に、轉業の歧路に立つ全國商工業者の前途に大なる光明を與へ、轉業の一道標たるであらう。

本稿は斯る見地から編纂したもので、以下山梨縣米穀業者の滿洲開拓現地報告の概要を記すこととする。

二、米穀業者の眼に映じた滿洲の農業

米穀業者の眼に映じた滿洲は、王道樂土であり、日本人の行くところである。山梨縣よりはよい、米穀業者の行くべきところである。我々は最初、滿洲糧食會社に就職することもよいと思つて行つたが、給料生活

者たることも一應はいふけれども、開拓農民として行くのが一番よいと考へた。

世間では、商人だから農業はやれないだらうと考へられるかも知れぬが、それはやれる、充分にやれる確信をもつて来た。

第一に満洲には土地が充分にある。耕作は畜力・機械力を使用する。それを使ふ力があれば、米屋であらうが、何であらうが、充分に農業をやつてゆける。

それに満洲では肥料が要らない。勞力は、内地人の耕地と耕地の間に滿鮮人の耕地があるから、勞力不足の場合は彼等を備つてやる。勞力上の五族協和である。家畜の使用は彼等に學び、耕作方法は、在來の滿鮮人の方法に工夫改良を加へればよい。滿洲の農業は耕地面積、肥料、勞力等の關係において、内地のやうな苦痛を感じない。朝から晩まで汗みどろに働いて、水も飲めないといふところではない。水あるところに米が穫れる、米の穫れるところに移民が出来る。而もその水田可能な未墾地が無限にあり、水稻を作るには、水田に種をバラ撒すればそれでいゝ。繩を張つて二、三本つゝ苗を植ゑる内地の田植とは全然違ふ。田の草取りも、稻と雜草とを一緒にひつくりかへせば、雜草は腐つて肥料になり、稻は強ぐん／＼伸びてゆく。人手が足りねば滿鮮人を雇へば足りる。

滿洲には立派な米が穫れる。味のいゝ米で、山梨縣の米より遙かにうまい。渡滿前、滿洲には米があるまいから持つて行かうと思つたが、その必要はないと云はれたからやめた。實際、滿洲に行つて見れば、豫想とは反對で、内地では純日本米が食へないが、滿洲では充分に食へる。

それに如には、高粱・包米・粟・大小豆等の滿人の主要食糧は勿論、蔬菜は玉菜・大根・人蔘・葱等々、内地の蔬菜一切が栽培され、南瓜が一箇二十疋、キャベツ一つが一キロ、大根の直径が六寸に長さ二尺三寸など、内地では到底も見られぬ出來榮である。而もそれが無肥料とは全く驚かざるを得ない。斯様に立派な、榮養の多い、新しい蔬菜が豊富に穫れる。

それから被服であるが、千振の牧畜成績によれば、綿羊を五頭飼へば一家族の被服が充分に出来る。それで食糧も充分であり、被服も心配はない。そのうへ建築用材も燃料も近くの山にある。滿洲では燃料に困つてゐるところはない。燃料を頗る經濟的に使つてゐる。飯を炊くとその煙がオンドルにはいつて室内を暖める。住宅も寒さに堪へるやうに出来てゐる。冬の間は内地では一般に農閑期であるが、滿洲では必ずしもさうでない。收穫物の調整から農産加工、春の作付準備、燃料や資材の蒐集、共同作業などで忙がしく、白晝々たる雪の野原に冬眠してゐるものではない。

嘗て、北滿では米は出來ぬと云はれたが、千振、彌榮で完全に成功した。これは開拓民の眞剣な研究と努力の結果であつて、それが北滿一帯の水田開墾の基本となつた如き全く敬服の至りである。また、馬の飼育では厩舎に隔木がない。これは馬が集合飼育されてゐるといふ譯ではないが、隔木を置いて一頭々々隔てゝ居れば一緒になつた時に蹴ッ飛ばす。それでは四、五頭並べた滿洲の耕作が出來ないから、隔木を置かず、馬と馬とを仲好く暮すやうに馴らしてゐる。これなど大いに學ぶべきところがある。

三、米屋は立派な百姓になれる

以上は甚だ大雑把ではあるが、滿洲の開拓農業は大體斯様なものである。それで結論的に言へば、滿洲開拓地の營農は決して難かしいものではない。我々米屋が立派な百姓になれる。我々の父、若くは祖父は百姓であつた。自分自身若い時に百姓であつた者もある。米屋がよささうだから米屋になつたまで、先祖代々米屋であつた譯ではない。百姓が米屋になつたやうに、滿洲の開拓農業がいゝから、米屋をやめて百姓になるは何でもないことである。他人の作つた米を買つて賣るより、その米を作る方がヨリ根本的である。それに、米屋は他の商賣に比べて力が要る、勞働を必要とする。従つて米穀業者は充分に農業勞働に堪へ得る。而も營農方法は何等の技術的修練を要しないから、米穀業者の開拓農民としての入植は、何の懸念も心配もない。四十歳前後までは、滿洲で充分百姓がやれる。リュックサック一つ背負つて行けば、明日から米の飯が食へる。

これまで滿洲に行くことは、滿洲に迫ひやられたり、行詰つて仕方なしに落ぶれて行くかのやうに思はれてゐた。それが嫌で行かなかつたが、滿洲に行くのは失業問題の解決のためではない。もつと積極的な意義をもつ大陸の開拓である。而かも行けば食ふ物は充分にある。仰山にいへば、三尺の河に四尺の魚が獲れる。食ふ物は何でも充分にある。衣食住共に充分である。決して卑しい淋しい魂性は起らない。二尺や三尺のケチな境界争ひなど毛頭なく、耕しても耕しきれないほど耕地は充分にある。

治安も何等の心配はない。匪賊を見たいと思つても

出て来ない。乞食が二、三人焚火してゐるのを、夜だつたから匪賊かと思つたことはあるさうだが。

だから滿洲に行く考へ方を換へさへすれば、即ち滿洲を認識し直しさへすれば、開拓民は充分に出来る。

ただ此所に注意せねばならぬのは、我利々々の自己本位では移民は出来ないことである。種蒔から收穫まで共同してやらねばならぬ。従つて、その心構へを換へ、協同的團體訓練をして行けば我々米穀業者は立派に百姓としてやつて行ける。滿洲は我々が行くに相應しい素晴らしいところである。

財團法人愛育會の愛育施設利用狀況調査

財團法人愛育會に於ては今後の愛育事業方策樹立の基礎資料を求むることを目的として農山漁村に於ける母性の季節別戶外労働時間狀況及び現存愛育施設利用狀況の全国的調査を決定、昭和十五年七月その豫備調査を施行したが、豫備調査の施行地域及び調査事項を掲ぐれば次の如くである。

豫備調査施行地域

- 埼玉縣(七月八日より十一日まで)
- 野本村(農)、堀兼村(農)、金子村(農)、日勝村(農)
- 千葉縣(七月八日より十日まで)
- 小櫃村(農)、七浦村(漁)、西畑村(山)
- 神奈川縣(七月二十日及廿五、六日)
- 成瀬村(農)、青野原村(山)、福浦村(漁)

同調査項目

調査項目は次の通りである

- (一) 部落の狀況(戸數、世帯數、現住人口、主産業)
 - (二) 母親及兒童數(三歳以上學齡前幼兒數、三歳以下乳兒數、學齡前乳幼兒を擁する母親數、最近一年間出生數)
 - (三) 母親の戶外労働時間狀況(各月別時間數、労働の主なる種類)
 - (四) 現存愛育諸施設利用狀況(保育所、共同炊事、助産組合、醫師及産婆、保健婦若くは之に類する者)
 - (五) 將來利用し得べき施設(學校、寺院、神社、公會堂、其他)
- 尚、右の豫備調査の結果に基き第一次調査として福島、石川、岐阜、千葉、埼玉、神奈川の六縣下全村の調査が行はれる筈である。

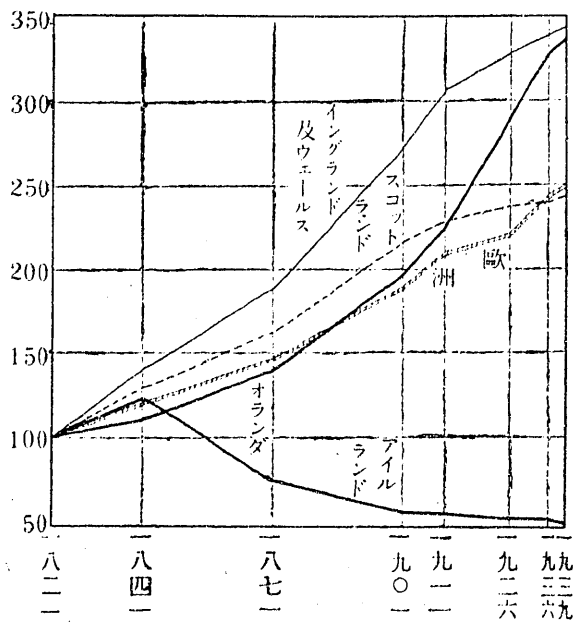
最近各國の人口情勢

人口漸減を續けるアイルランド

(アイル共和国)

獨立後第二回目の人口調査(一九三六年)の其の後の詳報によると總人口約二、九六八、四〇〇人、内男一、五二〇、四〇〇人、女一、四四八、〇〇〇人で、男千人に付き女は僅かに九五二人の割合に過ぎない。アイルランドはルクセンブルグ、ブルガリア及歐洲トルコと共に歐洲に於ける稀しい男子過剩國の一つであるわけ

だ。尤も主都ダブリンだけは例外で女子過剩を示してゐる。



アイルランド人口現象の最も著しい特徴は英國治下の最近百年間、歐洲諸國が一樣に人口著増をみたこの期間に一貫して人口減退を示してゐることである。別掲の如く數字を擧ぐれば次の如くである。

年	アイルランド (千)	イングランド及ウェールズ (千)	スコットランド (千)
一八二一年	一〇〇	一〇〇	一〇〇
一八四一年	一〇〇	一二〇	一一〇
一八七一年	九〇	一五〇	一三〇
一九〇一年	八〇	一八〇	一五〇
一九一一年	七五	二〇〇	一六〇
一九二六年	七二	二二〇	一七〇
一九三六年	七〇	二四〇	一八〇